

100 問集編集余話

3 トマス杯・ユーバー杯大会について

サッカーW杯の報道の蔭に隠れていたバドミントン界では、このたび男子が史上初の優勝、女子が33年振りに決勝進出という輝かしい成果を収めました。誠にめでたいことです。

そこで、トマス杯・ユーバー杯大会について、過去を振り返り、新しい情報を加えてまとめてみました。

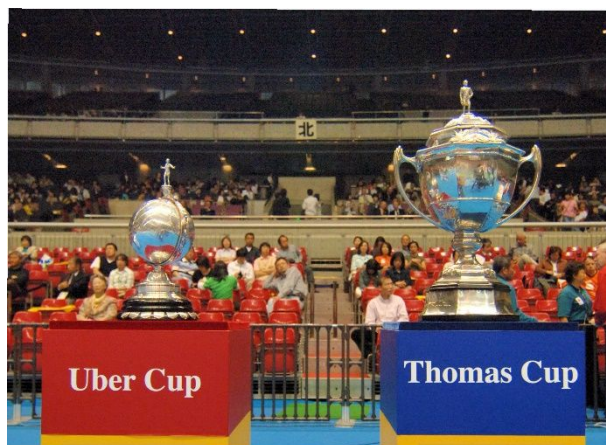
世界第2次大戦中(1939-1945年)は、オリンピックを初め、すべてのスポーツ界は休眠状態でした。

大戦終結後早速、国際バドミントン連盟(IBF)が中心になって世界の国と地域(以後国と略す)別対抗大会の開催を計画し、第1回トマス杯大会(1948-49年)に10の国が参加し、ヨーロッパ、パンアメリカ、アジアの3つのゾーンに分かれて予選ラウンドが開かれました。その結果、デンマーク、アメリカ、マラヤ(現在のマレーシア)が各ゾーンの優勝国となり3国による決勝ラウンドがイギリスのプレストンで開催され、優勝間違いなしとされたデンマークを破ったマラヤが最初の優勝国となりました。

第2回大会は、上記の各3つのゾーンの予選ラウンドで勝ち上がった3つの優勝国が前大会の優勝国マラヤと対戦するチャレンジラウンド制度が採用され、マラヤが2連勝しました。

第1回ユーバー杯大会は、第1回トマス杯大会から遅れて8年後の1956年に11の国が集まり、3つのゾーンに分かれて予選ラウンドが開かれた。その結果、デンマーク、アメリカ、インドが各ゾーンの優勝国となりました。3国による決勝ラウンドがイギリスで開かれ、アメリカが最初の優勝国となりました。

第2回大会は、トマス杯大会と同様にチャレンジラウンド制度が採用され、アメリカが2連勝しています。



筆者 撮影

男女それぞれの大会には優勝杯の寄贈者の名前から付けられた。男子はイギリスの名プレーヤーでありIBF初代会長のジョージ・トーマス卿、女子はイギリスの名プレーヤーのH.S.ユーバー夫人です。そして、それらの大会正式名は下記の通りです。

THE MEN'S WORLD TEAM BADMINTON CHAMPIONSHIP FOR THE THOMAS CUP

トマス杯争奪世界男子団体バドミントン選手権大会及び予選会

THE LADIES' WORLD TEAM BADMINTON CHAMPIONSHIP FOR THE UBER CUP

ユーバー杯争奪世界女子団体バドミントン選手権大会及び予選会

予選ラウンドは、男子は5単4複、女子は3単4複の団体戦を二日間かけて行いました。

開催日時と場所是对戦国同士で話し合っただけだったので、予選ラウンドがすべて終わるまで2年の月日を要しました。したがって、当時の大会は3年置きに開催されていたのです。

そして、各ゾーンの勝利国が決まると1箇所に集まってインターゾーンとチャレンジラウンドを行い、インターゾーンの優勝国がチャレンジラウンドで前回優勝国と対戦しました。

ゾーンは当初、ヨーロッパ、パンアメリカ、パシフィックの3つでしたが、男子の第3回(1954-55年)にパシフィックがアジアに変わり、第5回(1960-61年)からオーストラレーシア(豪州)が設けられ4つのゾーンになりました。

例えば、第5回ユーバー杯大会(1968-69年)は次のように行われたのです。

まず、予選ラウンドは、

ヨーロッパゾーンから、イギリス、スコットランド、スウェーデン、オランダ、東ドイツ、西ドイツ、デンマーク、アイルランド、南アフリカ8か国が参加してイギリスが優勝

パンアメリカゾーンから、アメリカ、カナダ、ペルー3か国が参加してアメリカが優勝

アジアゾーンから、タイ、韓国、インド3か国が参加してタイが優勝

オーストラレーシアゾーンから、インドネシア、オーストラリア、ニュージーランド3か国が参加してインドネシアが優勝

(インドネシアは本来アジアゾーンですが、隣のゾーンに出場することが許されていた。)

そして、インターゾーンとチャレンジラウンドが、1969年(昭和44年)6月に東京都体育館で開催され、インターゾーンの勝者・イギリスと対戦しましたユーバー杯保持国・日本が6-1で圧勝し、見事初防衛とともに2連覇を果たしたのです。

男子の第8回(1969-70年)、女子の第6回(1971-72年)から前回優勝国もゾーン優勝国と大会開催国にまじってトーナメントをすることに変わりました。すなわち、チャレンジラウンドがなくなりました。

また、男子の第12回(1982年)、女子の第9回(1981年)大会を最後に対抗戦の形式を男女とも3単2複に変えて、2年ごとに男女一緒に開催されるように改められました。

大会の形式は、各ゾーンの予選ラウンドの結果から選ばれた12の国による4組の予選リーグとその各組上位2国による決勝トーナメントを行うように改められました。

1996年の大会から、アフリカゾーンが加わり、世界バドミントン連盟(BWF)の支部でもある次の5つの連盟が主催して予選ラウンドを開催することになりました。

アジア(BAC)、アフリカ(BCF)、アメリカ(BPA)、オセアニア(BO)、ヨーロッパ(BE)

例えば、第27回トマス杯大会(2012年)は、前回優勝国・中国、大会開催国・マレーシアのほか各連盟主催の大会を勝抜いた10か国が参集しました。なお、アメリカ(BPA)からペルーが、アフリカ(BCF)からナイジェリアが含まれていました。

計12の国が、3国ずつ4組に分かれてリーグ戦を行い、その結果各上位2国計8国による厳正なる抽選のもと、決勝トーナメント戦を行い、中国が韓国、マレーシア、インドネシアをそれぞれ3-0で下し、4大会連続8度目の優勝を果たしました。(日本は、男女とも3位)



2006年 第24回トマス杯大会 東京都体育館（筆者撮影）

さて、今年（2014年）の大会出場国の選び方が次のように大きく変わりました。

前回優勝国と大会開催国のほかに、世界バドミントン連盟（BWF）が3月時点での各国のシングルス（上位3人）とダブルス（上位2ペア）の世界ランク得点を合計して国別ランキングを定め、上位14か国を合わせて16か国に出場権を与えることにしたのです。（予選ラウンドなし）

また、1チームは5人以上10人以内の選手を登録します。1対抗は3単2複でそれぞれ強い順にオーダーを決めます。レフェリーはオーダーを見て同じ選手の試合が続かないように順番を決める。なお、1対抗中、一人の選手が出場できるのはシングルス1試合とダブルス1試合のみと決められているので、1対抗に最低必要な選手の数はいくつとなります。

日本男子は1954年の第3回大会から、女子は1965年の第4回大会から参加しています。女子は初参加で初優勝し、以後第9回大会まで準優勝を挟んで通算5回優勝していることは既にご承知でしょう。

別の項目に、ト杯・ユ杯大会の過去の記録を掲載してありますので、ご参照してください。

日本選手団が今後のオリンピックを初め各種国際大会で益々活躍されることを期待しています。

以上